

辞典史

資料による中日大辞典編纂所の歴史 2

今泉潤太郎

辞典カードの返還

前に触れたが、昭和25(1950)年初、東京参議院議員会館で本間喜一学長も参加した日本中国友好協会発起人会が開かれ、直ちに結成準備会が発足、秋には協会が設立される運びとなった。ちなみに、協会豊橋支部は全国4番目に発足し、愛知大学国際問題研究所内に事務所を置いた。そして、本間以下の愛知大学教職員十数名と豊橋市民十数名を会員に持ち、愛知大学中国研究会所属の学生が学生会員として相当数加わり、以後当地において日中友好運動を活発に展開することになる。本間は鈴木擇郎と打ち合わせた辞典カードの返還願いの考えを、発起人で後に協会理事長となる内山完造に話し、中国側への伝達を相談した。内山は上海の内山書店老板(店主)として、大正6(1917)年創業以来、東亜同文書院と関係が深く書院学生や教授らとは昵懇で、昭和3(1928)年、鈴木が内山書店に居合せた魯迅に、自分の担当する中国語特殊講義で講演して欲しいと出講を頼んだとき、言葉を添えてくれたこともあった。当然のことながら、同文書院が進めていた華語辞典編集のこともよく承知していた。内山は好意的に本間の依頼に応じ、島田政雄にこの件を委ねた。島田は敗戦後、上海で中国側に留用、『改造日報』編集に当たるなど文化活動に従事し中国人の知己も多かった。その後、帰国し日中友好協会の設立に加わり、結成準備会幹事(後に協会理事、文化部長)を担当していた。この頃日本は米軍占領下にあり、そのプレスコードによって翻訳権の

無い外国文書は翻訳出版が許可されないことから、島田・鹿地亘らは日中翻訳出版懇話会を立ち上げ、郭沫若ほか五十数名の著書の翻訳権、『人民日報』以下の新聞、雑誌の掲載記事の翻訳権を島田・鹿地を原権利者として中国側から譲渡してもらった。そして、これを上記出版懇話会に委任し、翻訳出版して新しい中国の実情を広く日本国民に伝えたいと思い、その考えを旧知の康大川中国新聞総署国際新聞局日語科長に相談した。康は戦時中は鹿地らと共に活動したこともあり、すぐ上司である喬冠華局長にこれを上申した。喬はこの件について周恩来総理の指示を受けて動き、その結果、まもなく全部の翻訳承諾書が康から島田宛に送られてきた。このような経緯もあったので、昭和25(1950)年10月に、島田は旧知の康に愛知大学側で用意した華文のカード返還願——本間学長名で中国科学院院長郭沫若宛と鄭振鐸宛のもの及び内山理事長の添え書きの3通（ともに鈴木の書いたもの）を同封し、カード調査依頼の手紙を送った。宛名の郭沫若は知日派知識人として有名で、新中国成立後は中国科学院院長として学術文化界を代表する人物であり、内山と関係もふかい。もう一人の鄭振鐸については後でやや詳しく触れる。ところで『中日大辞典』の「まえがき」に、カードの返還依頼をしたのが1953年頃となっているのは、以下の事情による。即ち、島田から連絡を受けて、康は国際新聞局秘書長の馮安代に相談した後、カードの探索を始め調査した結果、カードは文化部副部長の鄭の所管する新華辞書社に保有されていることを突き止め、喬冠華局長に報告した。これにより、中国政府指導部内で審議された結果、カードを日本へ返還する決定が下されたのである。これを受けて、同年9月に康から島田に『人民中国』編集部気付けで、改めて郭宛に本間学長名によるカード返還要請をするようにとの連絡が入った。そこで、再度返還要請をしたのが「まえがき」にある日付の1953年である。この要請は、最終的に中国保衛世界和平委員会会長郭沫若氏（依頼状では中国科学院院長宛）の名義で、昭和29(1954)年4月10日付けで同会劉貫一秘書長から日中友好協会内山理事長宛に、中国政府の依托により同会からカードを日本国民へ贈る旨の通知が届き、受け入れられたのである。接收から9年たって、本間の熱意が国交のない中国政府を動かし、接收し、中国人民が

ら日本国民へ贈るという名目で接收されたカードの返還が奇跡的に実現したのである。

ここで、昭和20(1945)年8月15日の敗戦に伴って接收されてから昭和29(1954)年9月に日本へ到着するまでの間、辞典カードは一体どこでどうしていたのか、その所在を突き止めた康大川の島田宛の書信及び劉貫一秘書長名のカード返還通知その他を参考にして、あらためて経緯を辿ってみたい。

敗戦前、教職員とその家族40余名、18歳未満と病気療養の在學生40余名がいた同文書院は、中国各地の戦線から次々と復員してきた教職員、学生などで数百名に膨れていた。しかし、所有者たる上海交通大学から明け渡しを求められ、その後中国軍の進駐があり、最終的に、全員が上海居留日本人の居住区に指定された虹口地区にあった青年会館へ移った。やがて接收事務が始まり、本間らは接收書類の作成に連日とりくんだ。この書類が『日立東亜同文書院大学接交書』即ち国民政府(中華民国政府)教育部京滬区特派員辦公処による接收公文書であり、大学側は本間喜一、木田弥三旺(中国語教授)など4名の署名捺印、中国側は裘維裕以下4名が署名捺印した130ページに上る文書である。それは、土地、建物、什器、備品、消耗品、図書、標本、土地代金請求権(金条)、銀行預金、現金及び債権にいたる大学の全財産を網羅した膨大なものである。この間の事情は、当時上海交通大学が作成した『接收日誌』にも詳しく述べられており、例えば1945年10月16日の項には、「同文書院木田から財産目録の一部が整っていないので、数日待つて欲しいとの連絡があった云々」との記載がある。さらに20日から同文書院、教育部、交通大学三者立会いによる目録と現物の照合が始まり、これが12月15日まで2箇月続いたことも記載されている。また12月15日の項には「石炭屑と木炭屑だけまだ秤にかけてないので、重量未記帳の他は全て終えた云々」との記述もあり、現物との照合は徹底的になされており、目録は完璧と言っていいほどのものであることが分かる。しかし、それにもかかわらず、14万枚という膨大な数の華日辞典カードについては、この接收公文書中に何も記載が無いのである。前後するが、作成されたカードの総数は一体どのくらいあったのか、14万枚というのは返還通知の文書中に初

出のものであり、鈴木を始め辞典関係者からカード枚数について触れられたことはなかった。同文書院は昭和12(1937)年第2次上海事変の際に、大正4(1915)年創建の海格路校舎が掠奪、放火され、体育館以外の全財産——建物、図書、物産館資料ほか一切を焼失してしまった。校舎再建計画は立てられたが、当面の措置として、戦争により奥地へ避難して空き家となっていた紅橋路の上海交通大学の校舎を臨時に借り受け、敗戦時まで使用した経緯がある。昭和8年から作ってきた辞典カードもその際に焼失してしまったと考えられるが、これについても関係者の言及はない。従って、昭和8年から昭和12年までに作成された多数のカード(数万～十数万枚)は第2次上海事変により焼失してしまったので、翌年に開校された紅橋路校舎に於て、辞典カードの作製も振り出しに戻って改めて始められた結果、敗戦時には14万枚程度に達していたことになる。「昭和15年頃三省堂上海支店から辞典の出版について話しがあったが、まだそれは可能な状態になっていない云々」と鈴木は後に述べており、また前にも触れた昭和15(1940)年5月の『滬友学報』20号には、「華語研究室で数年来編集中の支那語大辭典は略完成に近づいているのであるが云々」との記述もある。カードが接收されたのは紛れもない事実であるが、なぜ接收文書中に辞典カードの名が記載されていないのかは謎である。

鈴木は「辞典カードの接收の際に将来可能であれば自分達の手で辞典を完成させたい」と鄭振鐸に申し入れた(『中日大辭典』の「まえがき」による)ことがあったので、カード返還依頼状を鄭宛てに送ったのである。また「カードは鄭振鐸の所に有った」と康から島田に連絡していることから、同文書院接收品中には辞典カードが確かに含まれており、且つ康はカードと密接な関係を持っていたことになる。鄭振鐸は『挿図本中国文学史』、『中国俗文学史』などで著名な文学者で、五四新文学運動では文学研究会に参加、上海商務印書館で『小説月報』の編集に当たり抗日救国運動を行なった文化人である。『鄭振鐸日記』をもとに編集された『鄭振鐸年譜』の1945年9月10日の項には、「戦区文物保存委員会は清理戦時文物損失委員会と改名し、日本の文化機関とその蔵書の接收を始めた。鄭は教育部から京滬区教育復員

輔導委員会委員に任命され、これは教育部京滬区特派員辦公処の蔣復璁主任委員が、鄭や馬叙倫など数名の知名人を集めて組織したものであったが、政府の圧力で名ばかりのものとなった云々とある。また、9月20日の項には「同文書院の接収に行った、経過情況は甚だ良いが、ただ資料室はからだったのが残念云々」とある。いずれにせよ10月20日から12月半ばまで続く接収期間中、辞典カードの接収時に鈴木は鄭と言葉を交わしたのである。ただし『鄭振鐸年譜』でカードについては言及されていない。これは『鄭振鐸日記』の記述にもとづいている。ただ、日記の方では9月18日にも同文書院を視察したという記述があるが、カードについての言及はない。昭和30(1955)年愛知大学辞典編纂処で到着したカードを点検した際に、「新華辞書社卡片」のゴム印を押した2、3枚の薄手のカードが紛れ込んでいた事実と、「鄭の所にカードがあった」との康大川の言葉、並びにカード返還通知中にある「接収されたカードは国民党の国立翻譯館に保管されていた云々」などからも、鄭振鐸と辞典カードとの密接な関係が浮かび上がってくる。同文書院の大量の資料など（大旅行報告書、旅行日誌などを含む）は接収後上海から南京図書館へと移送され、その後、中華人民共和国が成立したのち北京へ移送されて、現在は国家図書館に未整理のまま保存されている。しかし、辞典カードの方は、そのまま国立翻譯館（1932年中華民国教育部に設置され外国の學術書等を翻訳、出版する機関）に保管された。中華人民共和国になってから、カードが新華辞書社に引き継がれ辞典編集に使われていたのは、返還されたカードのなかに「新華辞書社卡片」のゴム印が押され、明らかに同文書院作製のカードと異なるものが数枚紛れていた事実からも推測される。新華辞書社はその名の示すとおり新中国成立の翌年5月、国家出版總署副署長葉聖陶が北京大学中文系主任の魏建功を同署編審局に引き抜き、新しい辞典を作るべく設置したものであり、『新華字典』という名の小型辞典として1953年7月人民教育出版社から出版されて以来今日まで、改版、発行され続け、総計は億の単位で数える中国随一のベストセラーである。また『新華詞典』の名で後年出版されることになる大型の別の辞典の編集も進められ、同文書院のカードはこちらで使用されていたものと推測される。鄭が

解放前から中国最大の印刷・出版組織である商務印書館と関係があったことは前にも触れたが、中華人民共和国成立後は、文化部副部長として新華辞書社を含む全中国の印刷・出版組織を所管する立場にあり、カードを日本へ返還するため政府部内で合意の形成にあたってキーマン的な人物であったとみられる。新華辞書社では、同文書院のカードを利用して「新華詞典」の編集が進んでいたところ、カードを日本へ返還する決定が下り、それを分別する作業が行われるなかで、数枚の「新華辞書社卡片」が紛れ込み日本までついてきたものであろう。この「卡片」(カード)は以上の推測に手掛りを与えてくれた証拠品ともいえる。いずれにしてもカードの返還に際して、鄭は接収時に聞いた鈴木を真剣に受け止めてくれたのである。

さて、昭和29(1954)年7月、本間は返還されるカードの受け取りに鈴木ら辞典関係者を訪中させるべく、伊藤武雄日中友好協会理事長と文部大臣を訪問し、日中文化交流のためビザの発給について外務省への助言を要請したが、叶わなかった。結局カードは、8月末に天津へ回送され、中国在留邦人の帰国船興安丸に載せられて協会側乗船代表(当時日中間には国交がなく、日赤、日中など3団体が日本政府に代わり中国政府との交渉をおこなった)の島田理事が受け取り、9月塘沽から舞鶴へ運ばれ、東京の日中友好協会に到着した。カード到着を前にして、本間は愛知大学が責任を持ちカードを受け入れ、華日辞典を編集・出版させるため、学内、学外の理解と支援を得るべく、この間の経緯と今後の編纂計画、行程表の素案作成を鈴木にゆだねた。鈴木は、本間から辞典カードの返還要請の相談を受けたとき以来、編集の具体策を考えてきたが、その念頭には常に内山正夫が存在していた。戦後、郷里で英語教員をしていた内山は、鈴木から中国語を教わった書院34期で、山口左熊(35期)や木田(41期)とともに鈴木らの世代を受け継ぐ同文書院の昭和10年代の中国語教員であり、華語研究会同人として鈴木のもとで辞典編集に従事していた。内山の人物を熟知する鈴木は、今度の辞典編集にも内山の参加が不可欠と考えていたのである。同年10月、本間は日中友好協会側と打ち合わせた上で、東亜同文書院の華語辞典関係者である鈴木擇郎(15期)を始め、熊野正平(16期)、野崎駿平(17期)、坂本一郎(20

期)を愛知大学に招き、今後の対応について協議した結果、カードは同文書院の華語辞典編集を継続し完成させる熱意と能力を有する愛知大学に引き渡し、愛知大学は辞典編纂処を開設し、鈴木のもとに内山を呼んで専従者とし、熊野らが協力するとの結論にいたった。この4名以外の辞典関係者(華語研究会同人)で連絡可能な者へは、鈴木が連絡し意見を聞いたところ、全員から同意が得られた。内山正夫は愛知大学教授として招聘され、翌年3月着任することが予定された。愛知大学により華日辞典の編集が行われることに同文書院華語研究会員の意見の一致をみた後は、学内の受入れ態勢を具体的に進めるのが課題であった。こうした動きに滬友会の一部から、カードを東京へ持って来て辞典編集を行うべしと異議が唱えられた。滬友会の滬は上海の別称で、東亜同文書院が上海に開設されたことに因んだ同文書院同窓会の名称である。敗戦で廃校となり母校を失った滬友同窓の心情には格別のものがあり、同文書院の存続が全く不可能となった現実を前にして、卒業生の母校再建の思いはより強くなり、悲願とも言うべきものであった。他方、在学生と教職員にとっては、一刻も早く身の振り方をつけなくてはならない厳しい現実問題が存在し、その解決策として本間は、同文書院再建が不可能と判断された時点で新大学——愛知大学の設立を始めたのである。これに対して、当時の滬友会幹部からは悪意に満ちた非難中傷がなされ、これに因り、愛知大学は滬友会と一時期不正常な関係にあったが、返還されたカードの処置をめぐって又もやこれが繰り返されたのである。

無からの出発を強いられた愛知大学は、綱渡り的な経営を余儀なくさせられた。本間は財政の危機的状況にある学校経営に取り組むなかで、大学財政に更なる圧迫とならざるを得ないであろう華日辞典の編纂・出版に対する学内の同意を、いかにして取り付けるかに腐心していた。本間は鈴木の作成した華日辞典編纂の顛末及び編集計画、日程表を基に華日辞典編纂・出版事業の骨子をまとめ、昭和30(1955)年初め、大学評議会に提案し同文書院時代からの経緯と歴史的意義について、言葉を尽くして説明した。審議の結果、編纂事業そのものは了承された。しかし、出版経費については異論や反対はあったが、取り敢えず、国際問題研究所内に辞典編纂部門を設け専任者を置

き、執行予算をつけることが認められた。これをふまえ本間は華日辞典刊行会をつくり、辞典出版費を広く世間から募集する計画をまとめ再度評議会に提案し、その同意を取り付けた。その後、学内外の意見を取り入れて研究所に準じた独立した組織とすることとし、同年4月、華日辞典編纂処が発足した。編纂委員長鈴木擇郎、編纂委員内山正夫、桑島信一、編纂協力委員として学内では小岩井浄、池上貞一、三好四郎、杉本出雲など同文書院の教員、並びに学外からは旧華語研究会同人の熊野正平一橋大学教授、野崎駿平東北大学教授、坂本一郎神戸外国語大学教授などが名を連ねた。実質的な当初のメンバーは鈴木、内山と編纂事務嘱託の愛知大学文学部中国文学専攻（3期）の今泉潤太郎の3名である。台湾在住の歐陽可亮（同文書院講師）も招聘されたが出国許可が下りず、翌年夫人の張祿澤が代って参加した。ちなみに、辞典編集委員は、全員が東亜同文書院華語研究会の関係者である。

資料

2-1 カード返還の請求（書簡類）

- a 内山完造日中友好協会理事長宛 本間学長の書信
- b 郭沫若中国科学院院長宛 本間学長の書信
- c 鄭振鐸氏宛 本間学長の書信
- d 郭沫若院長宛 内山理事長の書信
- e 鄭信鐸氏宛 内山理事長の書信
- f 本間学長宛 内山理事長の書信
- g 鈴木・桑島両教授宛 内山理事長の書信
- h 「人民中国」編集部宛 内山理事長の書信
- i 「人民中国」編集部宛 本間学長の書信
- j 内山理事長宛 劉貫一中国人民保衛世界和平委員会秘書長の書信
- k 島田政雄日中友好協会理事の書信

2-2 カード到着前後

- a 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6)

- b 鈴木教授宛 能智修弥理事の書信 (1)(2)
- c 伊藤武雄日中友好協会理事長宛 本間学長の書信
- d 華語辞典編纂顛末
- e 張祿澤女士招聘

今泉潤太郎 Imaizumi Juntaro 愛知大学名誉教授 専門：中国語学

日中友好協会理事長
内山完造先生

拝啓 益々ご健勝のことと存じ上げます。過日は新中国の実情についていろいろ御指教にあずかり有難うございました。

さて元東亜同文書院大学に於ては十数年に亘って華日辞典の編纂に従事しており、その原稿が中華民国教育部により接收されたのでありますが、若しこれが返還を受けることができれば、至急之を整理編纂して出版したいと存じて居ります。

この件について先般日中友好協会総会へ出席の桑島氏に依頼して貴会の御尽力を御願いたしましたところ、こころよく御承諾下さったとのこと誠に感激にたえません。茲許同封の願書を作成いたしましたから、よろしく御斡旋いただければ誠に幸に存じます。

願いの手紙は当局者であろうと思われる科学院長郭沫若氏宛のもの、愛知大学学長本間喜一より郭沫若氏宛一通、本間喜一より貴会宛のもの一通譯文添付、貴会から郭沫若氏宛てのもの（貴会の手間を省くために添えたもの、若し不適当ならば別に御作成願います）です。

外に当時の接收員として事情を知っている鄭振鐸氏宛のもの（本間学長から鄭氏宛のもの一通、本間学長から貴会へ御願の日本語のもの一通、譯文）

一九五三年六月●日
愛知大学学長 本間喜一

.....
〔注〕カード返還請求に関して、内山完造日中友好協会理事長宛の書信（控）。発信者の氏名未記入。1953年7月7日発。

中华人民共和国国务院
科学院院长郭沫若先生：

径启者，敝人曾於 1945 年时，在上海东亚同文书院大学当校长，兹有一事奉息，冒昧之处，务所原谅！

东亚同文书院大学所有图书类，已於 1945 年 12 月由中华民国教育部接收委员长蒋先生，委员郑振铎先生接收。那些图书类之内，有「华日辞典」原稿（卡片）约十五万片，分装五大木箱。

这些「华日辞典」原稿卡片，原是前东亚同文书院大学十来位华语教授费下十多年的心血所蒐集的，而且只剩下编纂工作就可以成书的。际此日本青年学子必须学习贵国的一切的时候，贵国语言文字的学习是不可缓的。那么，像样的华日辞典的编纂，自然也是不可稍缓的。所幸，有现成的华日辞典原稿，如蒙厚情将这些卡片交还我们，我们就赶紧编纂成书。如能如此，我们相信日本青年学子学习贵国语言文字，可以有许多帮助，中日文化满通上，也可以有所贡献。敝人有鉴于此，不顾冒昧，敢情将上述华日辞典原稿卡片交还我们，如蒙允许，那就感激不尽了。

再者，本大学既有曾在前东亚同文书院大学从事编纂该华日辞典的几位教授，工作人员，工作能力，可谓充实。如蒙允许所请，决不辜负厚情美意的。 敬祝
健康！

日本爱知县丰桥市
爱知大学学長 本間喜一
1953. 7. 7

[注] カード返還請求に関して、郭沫若院長宛本間学長の書信（控）。

郑振铎先生：径启者，曾於1945年12月，东亚同文书院大学所有图书类，烦先生莅校接受。那里面有「华日辞典」原稿（卡片）约十五万片，分装五大木箱。当将此卡片引渡时，曾向先生请求过：「将来如果有机会，务请将这些卡片交还我们，教我们整理成书，那就很感激的。」等话，不知道先生还记得不记得。

际此日本青年学子必须学习贵国的一切的时候，贵国语言文字的学习愈是紧要不可缓的。那么，像样的「华日辞典」的编纂，也是不可稍缓的。敝人有鉴于兹，很愿意请贵国有关方面交还该项卡片，以便编纂成书。因此，敝人已烦日中友好协会将请求书向科学院院长郭沫若先生寄上请求交还华日词典原稿卡片。关于此项卡片，先生知道的最为详细，因此务请先生得便向郭沫若先生说明，幸得玉成此事，那感激不尽了。敬祝健康！

一九五三年七月七日

日本爱知县丰桥市

爱知大学学长（前东亚同文书院大学校长）

本间喜一

[注] カード返還請求に関して、鄭振鐸氏宛本間学長の書信（控）。

中华人民共和国国务院
科学院院长 郭沫若先生：

径启者，兹有爱知大学学长本间喜一君（前东亚同文书院大学学长）函请本会转请先生将 1945 年 12 月被接收的华日辞典原稿卡片交还。详情请就本间喜一君原函看。

此种辞典在敝国所最缺乏，际此日本青年学子诸事要跟贵国学习的时候，如蒙交还，编纂成书，日本青年学子学习贵国语言文字，可以有许多帮助，中日文化满通上，也可以有所贡献。

本会有鉴于兹，经理事会同意，特此寄上此函转请，如蒙允许，感同身受了。敬祝健康！

日中友好协会
内山完造

附件 本间喜一君至内山完造函（译文）一通
本间喜一君至郭沫若先生的原函一通

[注] カード返還請求に関して、郭沫若院長宛内山完造理事長の書信（控）。

郑振铎先生

径启者：兹有日本爱知县丰桥市爱知大学学长本间喜一（前东亚同文书院大学校长）来函说：前东亚同文书院大学所有图书类，已於 1945 年 12 月由中华民国教育部接收委员蒋先生，委员郑振铎先生接受。他们大学有十来位教授费下十几年工夫从事编纂华日辞典，所收语汇约有十四万语，原稿卡片约十五万片，分装五大木箱，也与图书类一同被接收了。

际此日本青年学子愈要学习贵国的一切的时候，愈要学习贵国语言文学的时候，像样的辞典是愈是急需的。爱知大学有鉴于兹，很愿意请贵国有关方面将读原稿卡片交还，以便赶紧整理成书。

本会接到本间喜一氏来函，也甚表同情，经理事会同意，特此向科学院院长郭沫若先生转请交还卡片。据本间喜一氏来函说，当时既烦先生接收，其中消息先生知道的最祥，因此敢请先生得便向郭沫若先生说明，俾得玉浅此事，那么本会也感激不尽了。敬祝健康！

内山完造

2-1 f

本間先生

其後は大変御無沙汰致しておりますお許しください。

先般鈴木、桑島両先生からのお話があり先生からの書簡数通お送り頂きまして早速北京へ申し送りました処、本日返事が参りましたが、同封の通りでありますので甚だ恐縮で御座いますが左記宛に今一度正式の学校からの依頼状をお認め頂き度く存じます。

北京「人民中国」日本語版編集部

その時、私名義のものも一通お作り頂き度く存じます。私が署名して同送致します。無論郭先生へも私から依頼致しますして万全を期しますから、どうか至急御送り頂き度く存じます。

尚ほ同封の手紙は其時小生迄御返送頂き度く存じますが、お手許で御入用でしたら御留置き頂いても結構で御座います。 早々

十月 二日

於東京

内山完造 拝

〔注〕 本間学長宛内山完造日中友好協合理事長の書信。

2-1 g

鈴木
桑島 両先生

御無沙汰致して居りますお許しください。

先般拝誦しました同文書院時代の辞典のカードの件、九月十日附けで返事が参りました。それによりますとやっと其ありかが解りました由で別紙同封の通りに手続きをして呉れ一つ尽力して見るというて来ましたので愛大の名で左記宛に

人民中国、日本語版編集部

正式の依頼状をお認め下さい。日中友好協会理事長内山完造の依頼状を作つて送ります。御厄介ですが私の依頼状もお認め頂きますれば署名して送ります。本間先生宛にも同封いたしましたお渡し下さい。

小岩井先生已に御出發かと存じますがどうかよろしく御伝言御願ひ申します。

先は取りあえず御返事迄不

十月三日

於東京

内山 完造 拝

〔注〕鈴木・桑島両氏宛内山完造理事長の書信。〳別紙同封の返事〳のコピーは無い。

北京

「人民中国」日本語版編集部：

敬启者，兹有爱知大学学长本间喜一君（前东亚同文书院大学学长）函请本会转请贵编辑部将 1945 年 12 月被接收的华日辞典原稿卡片交还。详情请就本间喜一君原函看。

此种辞典在敝国所最缺乏，际此日本青年学子诸事要跟贵国学习的时候，如蒙交还，编纂成书，以便敝国人学习贵国语文与文化，是所至欣至感！

本会有鉴于此，特此寄上此函转请，如蒙允许，感同身受了。 敬礼

日中友好协会理事长

内山完造

1953. 10. 10

[注] カード返還請求に関して、「人民中国」日本語編集部宛内山完造理事長の書信（控）。1950 年頃、本間学長の要請を受けた日中友好協会島田政雄理事は中国新聞総署国際新聞局日語科長康大川氏に辞典カードの所在確認を依頼した。

北京「人民中国」日本語版编辑部：

敬启者，前东亚同文书院大学（原校舍被毁后，暂假上海国立交通大学校舍授课，以至于战争结束时）已于1945年12月由中华民国教育部接收委员蒋先生，委员郑振铎先生接收。当时被接收之图书文献之内，有「华日辞典」原稿（卡片）约十五万片，分装五大木箱。

这些「华日辞典」原稿卡片，原是前东亚同文书院大学的十来位教授费下十多年工夫所蒐集的，而且只剩下编纂工作就可以成书的。际此日本青年学子必须学习贵国的一切的时候，贵国语言文字的学习是不可稍缓的。所幸，我们既有现成的华日辞典原稿，如蒙厚情将这些原稿卡片交还我们，我们就赶紧编纂成书。

如能如此，我们相信日本青年学子学习贵国语文与文化，可以有许多帮助，中日文化满通上，也可以有所贡献。敝人有鉴于此，不顾冒昧，敢情将上述华日辞典原稿卡片交还我们，如蒙允许，那就感激不尽了。

再者，本大学既有曾在前东亚同文书院大学从事编纂该华日辞典的几位教授，工作人员，工作能力，可谓充实。如蒙允许所请，决不辜负厚情美意的。敬祝
进步！

日本爱知县丰桥市
爱知大学学長（前东亚同文书院大学学長）
本间喜一
1953. 10. 6

[注] 中国側より「人民中国」編集部宛にカード返還請求の手続きをするようとの指示を受けて出したもの。

華日辞典カード十四万枚

友好協会内山理事長あてに、中国人民保衛世界和平委員会劉貫一秘書長から「日中国の文化交流の贈物として華日辞典の原稿をおくる」むねの便りがあった。

この華日辞典の原稿というのは、上海にあった東亜同文書院大学で昭和五年ころから計画され、これまで最大、最善のものと定評ある「中国辞典」をしのぐ完全なものをつくる予定であった。計画には当時の同文書院大学長本間喜一氏（現愛知大学長、本協会評議員）ら日本人教授十人に中国人の教授も参加、あらゆる中国辞典などをあつめて原稿のカードを作っていた。終戦のおり原稿は大学の資金とともに国民政府に接収され、その後わからなくなっていたもので本間学長らはあきらめきれず、内山理事長を通じて探していたが、内山さんは昨年春、在華邦人の帰国交渉で北京に行つたときにも郭沫若氏に会つてお願いしていたのがこのほど実を結んだものである。劉貫一氏からのたよりによると、カードは敵産として接収したのだが、とくに文化交流の贈物としましようにとのことで、講和もまだ成立していない交戦状態継続中の国の国民にたいし、このような措置がとられたことは歴史上稀有のことであり、関係者はもとより、日本文化界の大きな感激をよびおこしている。のこされた問題は、この好意にこたえて一日も早く受取りの船を用意することであり、当の愛知大学はもちろん日本学術会議その他文化界の協力によって政府に交渉して特別の措置をとることが要望されており、これを機会に学術交流を活発にするための文化使節の交換や日本側からの中国の貴重な美術品で戦時中のどさくさに日本にもちかえられたものの返還の声もおこっている。

劉氏から内山氏への便り

日本中国友好協会理事長内山完造先生

貴方が本会郭沫若主席に出された手紙うけとりました。貴方が過去上海において編集された「華日辞典」のカードの件について私たちは各方面をさがしましたがすでに関係部門の協力によりさがしだすことができませんでした。

この「華日辞典」のカードは日本が投降したときに国民党の国立編訳館に接収され、当時すでに一部が遺失されておりましたがなお十四万枚が保存されており、開放後わが国の人民政府に接収されたものであります。

この辞典カードは敵産として没収したものであり、本来ならば、おかせしできないものであります。中日両国人民の友誼と、文化交流促進の見地から、今はわが会がうけとり、文化交流の贈物として、日本の方々にわが会からお送りするものです。

私たち相互の協力により中日両国人民間の文化交流が日ましに発展し、両国人民間の友誼の日まし強固なることを信じております。かなりの数にのぼるこのカードを郵送す

2-1 j

ることは不便でもあり、万一、遺失するがごときことになればきわめておしいことである
りますので、どのようにしてお送りしたらよろしいか、なにとぞご返事ください。以上
敬
礼

中国人民保衛世界和平委員会

秘書長 劉 貫 一

一九五四年四月十日

〔注〕日中友好協会機関紙「日本と中国」一九五四年六月十一日号所載。

愛知大学中日大辞典編纂所
所長 今泉潤太郎 様

華日辞典原稿カード返還までの経緯お問合せの件について

日中友好協会顧問 島田政雄
1994年9月15日

標記の件につき、大変後れましたが御返事申し上げます。

7月22日付をもって御手紙並びに「中日大辞典」改訂第二版1部頂戴いたしました。

私は7月23日、急性閉塞性胆管炎の発病で、同夜東京専売病院に入院いたし50日間入院、9月9日全快退院いたしました。そのため御返事が遅れました事情御了承下さい。

御問合せの件について病床より妻に委嘱し、御送り頂いた「返還までの経緯」のコピーを中国側関係者康大川氏宛送り、返事ももらいました。両者を併せ私の関与した限りの経過を申し上げます。

1949年10月	中華人民共和国成立。
1950年1月12日	東京参議院会館にて日中友好協会発起人総会開き、日中友好協会準備会成立。
1950年夏	日中両国間に新聞、雑誌等資料交換恒常化 中国側責任者 康大川(中華人民共和国新聞総署国際新聞局日語課長兼人事科長) 日本側責任者 島田政雄(日中友好協会準備会幹事)

(註) 康大川氏と島田政雄の関係

康大川氏は戦時中、中共対日工作員として鹿地亘らの日本反戦同盟などの連絡担当、島田は日本敗戦後上海にあって中国側に留用、<改造日報>編集に当り康大川らと知己となる。(以上の経緯は島田政雄著<四十年目の証言>に詳しい)

1950年秋	日中翻訳出版懇話会成立。日本側の依頼に応じ中国より郭沫若以下50数氏の翻訳権と人民日報以下中国新聞雑誌の掲載記事翻訳権を鹿地亘、島田政雄を原権利者として譲渡を受ける。鹿地、島田は譲渡をうけた翻訳権を翻訳出版懇話会に
--------	---

委託。

(註) 当時、日本は米軍占領下にあり、米軍のプレスコードにより、翻訳権のない外国文書は翻訳出版が許可されない事情にあり、この事情を島田は康大川に伝え、康大川は上司国際新聞局長喬冠華に上申、喬冠華は周恩来の指示を受け著名士全部に翻訳承諾書を書かせて康大川より島田宛送ってきたもの。

当時この貴重な承諾書を米軍担当者が島田、鹿地宅に確認に来た。

1950 年末 華日辞典カードにつき島田政雄より康大川に問い合せて調査依頼。

(註) この件については島田の記憶ははっきりしない。しかし康大川氏は明確に記憶しているとのことで、島田は鈴木擇郎氏よりの調査依頼の手紙をそえて康氏に依頼したらしい。

1950 年末～51 年春 華日辞典カード調査、島田より調査と返還促進の依頼をうけた康大川氏の動き。

康大川氏は島田の依頼を受けて、華日辞典カードの行方を馮安代？（国際新聞局秘書長、現に健在とのこと）に依頼して調べてもらった。結果鄭振鐸氏の手もとにあることが判明した。康大川氏はこの旨、喬冠華局長に報告したところしばらくして喬冠華氏から康大川氏に返事がありこの件は返送することに決まった。送還についてはこちらで適当にやるから＞ということで康大川氏はこの旨島田に伝えた由。（島田は82才という年かさっぱり覚えていない）おそらく康さんからそう知らされてそれを依頼された鈴木擇郎氏に伝えたと思う。康氏の記憶によればこのことが朝日新聞に洩れて朝日新聞の50年末か51年春大きく三段又キの大見出しで載り、＜何でも康という人の斡旋で返されることになったとか＞その康とは範寿康のことではないかなどとデカデカ出たことを康大川氏は今でも覚えているという。

以上のようなわけで＜返還までの経緯＞に書かれている

1953 年 7 月 本間学長より…以下

1953 年 10 月 5 日 康大川人民中国日本語版編集長より…

は誤りと康大川氏は指摘しています（島田宛返書）。ことに（人民中国日本語版）ができたのは1963年6月であって、てんで間違いとの康大川氏の指摘です。

1954 年 9 月 12 日 邦人引揚げ船興安丸の乗船代表として島田が天津にゆき、天津で康大川氏よりカードを受取り、興安丸に積みこみもちかえったことは間違いありません。

以上ですが、康大川氏は北京に現在健在です。詳しいことは康氏に直接おきき下さるとよいと思います。

〔注〕 文中にある朝日新聞の記事は2・2 a(1)参照。

2-2 a (1)

華日辞典の原稿還る

旧同文書院の関係者に 中共の好意で

【豊橋発】終戦当時中国国民政府の手で接収された旧東亜同文書院大学の貴重な華日辞典原稿が、中華人民共和国の好意で元の関係者の手へ返そうという話が進められている。

元上海にあった東亜同文書院大学では、さる昭和五年から華日辞典の編纂を計画、鈴木沢郎教授（現愛知大学教授）ら十二氏の手で資料を集め、終戦直前までにカード約十四万語を集めて整理を終り、出版する準備を進めていた。

ところが終戦となり、このカードは他の同大学資産、図書三十万冊とともに同廿年十二月国民政府文教部に接収され、本間喜一同大学学長ら関係者はこれを大きな木箱五つに入れ、くれぐれも散逸しないようにと依頼して交通大学（元東亜同文書院大学）の二部屋に積み上げ、同二十一年三月日本に引揚げた。

その後八年、当時の関係者であった豊橋市愛知大学本間学長（旧東亜同文書院大学学長）小岩井浄、鈴木沢郎両教授らの間でこの辞典原稿を何とか返してもらい出版しようという話が出て、さる七月日中友好協会理事長内山完造氏を通じて中華人民共和国政務院科学委員長郭沫若氏および当時の国民政府側接収委員であった文学芸術工作者鄭振鐸氏あてに接収された関係辞典原稿を改正し、中日文化交流に寄与したいから返してほしいと手紙を出したところ、さる五日愛大本間学長あてに届いた内山完造氏の手紙に同封して康（恐らく文士范寿康氏か）という人から日本語で「あり場所を調べるために手間どったが保存されていると分ったから人民中国日本語版編集部あてに正式に申請するように」と書いてあった。

この報らでカード類は中国内戦などで散逸しているのではないかと半ばあきらめていた本間学長は大喜び。早速さる七日内山完造氏を通じ書類を送った。愛大では今年中に到着するとみて同大学国際問題研究所で予算約三百万円で出版する計画をたて、近いうちに華日辞典編さん委員会を作り、同大学鈴木、桑島両教授のほか旧東亜同文書院教授だった大阪外国語大坂本教授、東北大野崎教授、一橋大熊野教授らにも参加を呼びかけることになった。

〔注〕朝日新聞 昭和二十八年一月三日夕刊所載。文中の康とは康大川、范寿康は誤り。

2-2 a (2)

華日辞典受取に使節を

協会代表 大達文相に会見

華日辞典の原稿カード十四万枚を中国から贈られること（既報）について友好協会では受入に慎重を期し討議を重ねた結果、丁重な礼をもって中国へ受取の使節を出すことが適当であると結論し、七月二十一日愛知大学本間学長、協会伊藤常任理事（現理事長）らは文部省に大達文相大臣を訪問、文化交流の立場から文部省の援助を希望し使節派遣の旅券発給について外務当局への助言を要請した。

これにたいし大達文相は「両国に国交のないときこうした問題をとりあげることとはむづかしいが、日中学問の交流の立場から考慮してみたい」と答えた。

その後協会常任理事会ではこの問題をつよく推進することとし、さしあたり中国への受取りの使節は伊藤理事長、能智理事、鈴木愛大教授と決定、旅券の手続をとる。

〔注〕 「日本と中国」一九五四年八月十一日所載。

2-2 a (3)

“日本国民に贈る”

華日辞典 まず内山氏の手へ

興安丸に積込まれた「華日辞典」原本カードを受け取りに舞鶴に向った鈴木沢郎愛大教授は二十八日帰豊したが、同カードは「日本国民に贈る」とされ、屈先が日中友好協会代表内山完造氏としてあるので、いったん東京の内山氏のもとへ送られ、近目中にあらためて愛大へ渡される運びとなった。

〔注〕毎日新聞 昭和二九年八月三〇日所載。

2-2 a (4)

中国へ 四千冊の本贈る

『日華辞典』の返礼にと

十二日舞鶴を出港、塘沽へ向う興安丸に、日中友好協会乗船代表嶋田政雄氏の荷物として、納豆研究で有名な宇都宮大学教授山崎百治農博の蔵書二十五箱（約四千冊）が積込まれることになった。これはまさに、中国科学院郭沫若委員長から、日中友好協会内山完造副会長あてに「終戦当時東亜同文書院で編サン中だった日華辞典の原本となるカード約三十万枚は、当方で保管している。これを愛知大学本間学長、鈴木教授らむかしの同文書院研究グループの手に返したい。送る方法を考えてくれ」という意味の連絡があり、同協会では今回釈放戦犯を引取りに行く興安丸の帰航に積込むこととして郭委員長の承認を得たもの。

同協会に最近入った電報によれば、カードはすでに天津に回送されているという。なお山崎博士の蔵書は、日中友好協会からこの話をきいた山崎氏が、そのお礼として中国科学院に贈りたいと申し出て、こんど送られることになったもの。

〔注〕朝日新聞夕刊 昭和二十九年九月九日所載。

2-2 a (5)

廿四日頃舞鶴へ 興安丸

旧軍人等いよいよ歸国

中国人民解放軍によって赦免された旧日本軍人四百十七名をふくむ在華同胞五百六十名の帰国をむかえるため三団体では着々と準備を整えている。

(中略)

乗船代表、島田政雄氏

日中友好協会常任連絡会議では一日、今次帰国船の乗船代表として本部常任理事・組織宣伝部長の島田政雄氏を中国へ派遣することに決定した。

華日辞典もこの船で

中国から贈られる旧東亜同文書院の華日辞典原稿カード十四万枚の受取使節として決定された友好協会理事長伊藤武雄氏、常任理事能智修弥氏は、今回の帰国船に便乗して中国を訪問できるよう、外務省、文部省などと折衝中である。

またこの機会に協会では、さきにおこなわれた日中友好七夕運動によって全国から集められた短冊約一万五千枚をはじめ、多くのおくり物を托する予定。

〔注〕 「日本と中国」日中友好協会機関紙一九五四年九月十一日所載。

2-2 a (6)

終戦の年、上海の東亜同文書院では、一団の教授が黙々として華日辞典の原稿をカードにつくっていた。卅万語、それまで最大といわれた石山福治氏のものに何倍かの分量で、まさに画期的なものになる筈だった▼敵産として没収せられて八年、在留邦人問題でむこうへいった内山完造氏に頼み、郭沫若副総理にしらべてもらった結果ゆくえがわかった。こんど戦犯引揚船でもたらされるカードがそれである▼この仕事を立案し経費を出した東亜同文書院は消滅したが、仕事にあたった熊野一橋大、鈴木愛知大教授等は健在だから、今後これをどう編集してゆくかについては、教授連に第一の発言権がある▼カードは一部紛失しているというし、また、湖南人が中共の天下をとったため、湖南の方言が通用し、そんな語をも入れねばならぬ。あたらしくやり直さなければならぬから、その経費が大変だ。どのようにして世界第一の中国語辞典として結実させるかが今後の問題だ▼出版者の多くがベスト・セラーをねらい、価値があるとはわかっていても手を出さないのが日本だ。その実、出版社の名が永久にあるのは、一時の流行書を出すからではなく、不朽の名著を出すことによるのである▼諸橋轍次博士の漢字大辞典、山崎総与氏の中国地名辞典、永尾龍造氏の中国風俗誌など、埋れた大著の列に華日辞典も入るかとおもうとまことに寒心にたえぬ▼やむを得ずんば、国立の編訳局案でも提唱しようか。

〔注〕産業経済新聞コラム「点心」昭和二十九年九月十三日附所載。

2-2 b (1)

拝啓 急に寒くなって参りました。協会も李徳全女史歓迎準備その他で忙殺されております。

さて待望の華日辞典カードも一昨日運送屋の手から協会に届けられました。つきましては早速これの編集にとりかかって頂かねばならないと思いますが、これについて、如何ような機関で如何様な方法でやって頂くにつき至急愛大側の御意見を伺わせて頂きたいと思ひます。皆様の御意向を伺つた上、至急委員会をひらき、実行にうつるように入りたいと思ひます。

いろいろ御尽力深く感謝いたします。
今後とも何卒よろしく御願申しあげます。

二九年十月九日

日中友好協会
能智修弥

鈴木様

〔注〕愛知大学内鈴木教授宛能智修弥氏の書信。

カード木箱は八月二十八日舞鶴着、東京日赤へ。

東京日赤より十月七日、日中友好協会本部へ届く。

十月二十三日、日中本部開催者合同。

十二月八日、カード木箱2ヶ愛大到着。

2-2 b (2)

冠省

華日辞典の原稿カードは中国側の好意により、先般興安丸で日本に送られ、本月七日友好協会に着きました。

つきましては今後の管理や編集の方針などにつき、元の関係者の方々に御意見を伺わせて頂きたく存じますので、御多忙中ではありますが万障くり合せのうえ、左記により御来駕をお願い申し上げます。

一、とき 十月二十三日(土) 午後二時〜四時

二、ところ 日中友好協会 会議室

なおこれは鈴木沢郎氏、野崎駿平氏、熊野正平氏、坂本一郎氏の四氏にお出席をお願い致しました。

一九五四年十月十五日

日中友好協会文化委員会

能智修弥

〔注〕豊橋市新八町三九号鈴木教授宛能智修弥氏の書信。

2-2 c

昭和二十九年十二月〇日

日本中国友好協会

理事長 伊藤武雄 殿

愛知大学学長 本間喜一

拝啓 華日辞典原稿カード二箱十二月八日異常なく到着いたしました。中華人民共和国
対外文化協会の御好意と貴会の御尽力とに対し厚く御礼申し上げます。

この上は、この原稿を補充整理して良心的な華日辞典を日本人の為に完成し、以って
絶大な御好意御尽力に報いたいと存じて居ります。経費の調達、編纂室の整備、編纂員の
配置等々多少の日時を要するため、工作開始は明春三、四月頃になるかと存じます。

今後共一層の御援助御鞭撻をお願いたします。中国方面へは適当な機会に貴会よりよ
ろしく御礼申上げ下さるよう御願申し上げます。

敬具

〔注〕 伊藤理事長宛 本間学長の書信（鈴木教授手書き原稿）

華語辞典編纂顛末

東亜同文書院華語担任教授等は優良な華日辞典の出版されないことを憂いていたが、いよいよ自らの手で之を完成せんことを期し、東亜同文書院華語担任教授、助教、華人講師全員（時期により不同であつたが、大体十一、二名）で之に當ることとし、昭和七年東亜同文書院當局の援助を受けて発足し、資料の蒐集にとりかかった。

実施方針は、東亜同文書院において華語を担当する教授、助教、講師はすべて、華日辞典編纂に従事すべきことを申合わせた。学校當局よりは、この事業のため特に専属日本人事務員一名を與えられ、研究室の提供を受け、カード、カード整理箱、文具等の消耗品の供給を受けた。

資料は先ず日支両国の華語に関する辞典に材料をとり、更に動・植・鉱物辞典、經濟辞典、百科事典、新聞雜誌、文藝作品、華語教科書等にわたつて取材した。

昭和十五・六年頃時局緊張のため一時工作が停頓したこともあるが、十八・九年頃出版に關して種々の意見があらわれ、結局、この種のものには性質上完全を期することは不可能であるから、現有のうちでは最良のものであるとの自信を持てる以上、この辺で一度整理出版すべしとのことに落ちつき、一部のものには整理にかかり、一部のものには更に蒐集をつづけ、昭和二十一年末頃までには全部整理を終る豫定であつた。

昭和二十年終戦時において、原稿カードは約十四萬枚であつたが、一語でカード一枚にわたるものもあり、また同一語が数枚に亘つて重複しているものもあるので、實際の語数は十萬語餘りであらうと推定される。

終戦時、このカードを引渡した時、將來可能な時機が来たらわれわれに完成させてもらいたい旨を接収委員鄭振鐸氏に申出ておいたので、今回日中友好協会を通じて返還を願出たところ、贈與という名目で返還されることになった。

昭和二十九年七月 日

旧東亜同文書院大学学長

愛知大学学長

本 間 喜 一

〔注〕辞典カードの返還が決定的となり、カード到着後、本学における編集・出版に對して学内外への説明の爲の参考資料の作成を、本間学長から命ぜられ、鈴木教授が作成したものである。

2-2 d

拝啓 愈々御清適の段およろこび申上げます。

華日辞典編纂の件については、三月末、内山正夫氏が専任者として来任、編纂工作進行に關し諸般の準備を進めて居りましたが、この程大体これを終つたので、甚だ御足労ながら評議員（暫定規約による）の方々のご来会を願ひ、全般的の審議決定をお願いいたしたいと存じます。期日は七月九、十、両日といたしたいのですが、ご都合如何でしょうか折り返し御返事願ひたく存じます。御返事の次第により日時を確定の上評議員会議長本間喜一氏より改めて招請状を差上げたく存じます。御来豊については、失礼ながら往復汽車賃を差上げ宿舎は学長公館にお泊り願ひ予定であります。尚暫定規約および参考資料同封申上げます。

敬 具

昭和 年 月 日

愛知大学 鈴木 沢 郎

様

拝啓 愈々御清適の段およろこび申上げます

さて早速であります。華日辞典編纂の全般的審議のために評議員全部の方々の御参集を仰ぐ件につきましては、さきに鈴木沢郎教授より評議員各位の御都合をおうかがい致しておりましたところ、七月九、十日の期日では野崎先生が講義の関係上御都合がわるいことが判りましたので、さらに七月十六、十七両日の線にて各位の御都合をおうかがい致しました結果、只今までに判明しましただけでも坂本先生の御都合がわるく御回答未着が二名となっております。

以上のような次第で期日を後に延期しますと一層御参集に支障を来す懸念がありますので甚だ勝手ながら会期は最初の案のごとく七月九、十両日と決定させて頂くことに致しましたので何卒事情御諒承の上、七月九日午前の審議開始に間に合いますようなるべく七月八日中に御着豊賜りますようお願い申し上げます

尚、乍恐縮御来豊の汽車賃につきましては一時お立替おき下さいますよう併而御願致します。

先は右取急ぎ御願ひ迄

昭和三十年七月五日

愛知大学長 本間 喜一

殿

〔注〕辞典刊行会評議委員会開催通知。

2-2 e

逕启者：兹聘请
先生为讲师担任中国语科，如蒙
概允，至于来回旅费以及在日常生活费，一切由敝人负责据保。兹将聘书正副各一纸一并奉
上。再者，新学年定于明年四月中旬开始，届时务祈赶到，是盼！此致
张祿泽女士！

爱知大学学長 本間喜一

一九五四年十二月二十二日

聘书

兹聘请

张祿泽女士为本大学中国语讲师

此聘

爱知大学学長

本間喜一

一九五四年十二月二十二日

〔注〕張祿澤女士への招聘状（鈴木教授手書き原稿）。張祿澤女士は同文書院大学
中国語講師歐陽可亮氏夫人。歐陽氏は当時台湾から出国することが出来な
かったので、先に来日することとなった。